

グリーン四国

四国森林管理局

高知市丸ノ内 1 丁目 3-30

TEL 088-821-2052

FAX 088-821-4834

ホームページアドレス <http://www.rinya.maff.go.jp/shikoku/>

電子メール shikoku_soumu@rinya.maff.go.jp



四国山の日

No.1138 2015年1月号

迎

春



二の鎖小屋付近から見た瓶ヶ森（奥）

新年のあいさつ

四国森林管理局長 浅川 京子



明けましておめでとうございます。
 ございます。

我が国の森林は、人工林を中心に本格的な利用期を迎えており、国内の豊富な森林資源を循環利用することが重要な課題になっていきます。このための方策として、昨年の「日本再興戦略」においては、国産材CLT

(直交集成板)普及のスピードアップ、木質バイオマスのエネルギーの利用、国産材の安定的かつ効率的な供給体制の構築などを進め、林業の成長産業化を進めることとされました。

四国は全国有数の森林地域で、人工林の割合が多く、森林資源が着実に増加してきており、伐採期を迎えた森林も増えてきています。地球温暖化対策として森林の若返りを図るためにも木の伐採とその後の森林づくりを進めていく必要があります。

ます。また、若年人口の減少が問題になっている地域の多くが中山間地域に位置しているため、これらの地域に豊富に存する森林資源を活用し、地域の主要産業である林業の振興を通じて地域経済の活性化と人口の定着を進めていくことが必要です。

このような中、四国では、大型製材工場や木質バイオマス発電所の操業開始、産学官によるCLTの開発普及など、豊かな森林資源の利用や林業の振興につなが

る動きが活発になってきました。各県でもこれらの動きを後押しすべく、国産材の生産体制を整備し、供給を増やそうとしています。

国有林は四国の森林面積の一割強を占めています。国有林野事業は、自ら森林を管理・整備し木材を生産する「林業事業体」であると同時に、国の政策を推進する機関でもあります。このような国有林野事業の位置付けを踏まえて、本年の業務運営に取り組んでまいります。

具体的には、低コストで効率の良い施業方式を率先して採り入れ安定的な木材生産・供給を進めるほか、国産材需要の拡大や木材流通の合理化などを進める先

進的な取組に対して優先的に木材を販売することを通じて、四国の林業の飛躍のために力を尽くします。また、林業経営改善に資するような先進的な技術の開発普及や森林・林業経営を担う人材育成に取り組みます。さらに、問題になっているシカなどの鳥獣害対策に関係者とともに取り組むとともに、昨年の台風などにより被災した山地の早期復旧や災害リスクの多い四国の特性を踏まえ被害の未然防止に努めます。

本年においても、国有林野事業の運営を通じて、地域の振興に貢献して参りたいと思いますので、よろしくお願い申し上げます。

間伐事業ヶ所の見学の様子



一月二七日に、平成二六年度第二回国有林モニター勉強会を開催しました。当日は、好天にも恵まれ、四国4県から国有林モ



ニター一五名が参加されました。

最初の視察地、高知県須

崎市の朴ノ川山国有林にお

いては、間伐事業実施箇所

で、実際に架線で材が搬出

される様子や高性能林業機

械（プロセッサ）の造材等

を見学しました。モニター

の皆さんは、説明を大変熱

心に聞き入っておられ、活

発に質問や意見を述べられ

るなど、森林整備について

理解を深められていました。

午後は、四国森林管理局

森林教室体験の様子



において、技術普及課より

森林環境教育について、そ

の取組紹介を行い、実際に

ブローチを作成する等、森

林教室を体験していただき

ました。

今回の勉強会について、

参加したモニターの方々か

ら、「林業の機械化が思っ

ていた以上に進んでいて驚

いた。」「説明だけでなく体

感できたので頭に入りやす
かった。」等の感想をいた

だき、大変有意義な勉強会
となりました。



ニホンジカ(以下「シカ」)

による被害が深刻化する三

嶺山系では、平成一九年度

から、関係機関・団体や地

域住民等が連携して、防護

対策やシカ捕獲に懸命に取

り組んでいます。

しかしながら、通常の方

法では捕獲できないアクセ

スの悪いエリアが、シカの

逃げ込み場・繁殖地等とな

り被害対策の障害となっ

ていることから、このエリア

での捕獲を目的として、平

成二五年一〇月に、森林管

理局、高知県、香美市、香

美猟友会、登山団体等一〇

機関・団体が「三嶺シカ捕

獲実行委員会」をつくり、

自衛隊にも協力頂けること

となりました。

実行委員会で決定した捕

獲方法の概要は、捕獲区域

を、西熊山附近の稜線から

フスベヨリ谷までの間に約

一五〇ha設定し、登山団体

捕獲支援班等入山前打合せ
(三嶺林道終点)



が勢子(捕獲支援班)となつて、稜線から猟友会(捕獲班)が待つ谷までシカを追いつむこととし、自衛隊が、現場と本部間の通信連絡と、ヘリによるシカの動向の偵察でサポートするという作戦です。

本作戦は、猟銃の使用はもとより、勢子が道なき急傾斜地を下降すること、多くの

捕獲班(猟友会待機中)



の機関及び人数が参加すること等から、特に安全の確保に万全を期するため、予行演習(発砲以外全て実施)や検証及び対応策について協議を重ねる等長期に渡って準備を進め、十一月六日に捕獲本番を実施しました。

本番当日の参加者は、局署(高知中部、徳島)職員一名を含む約二〇〇名と

なり、早朝四時からバス等で森林管理局等より各配置箇所へ出発し、六時には、三嶺山系の展望所に、前日から自衛隊が設営してくれた天幕に現場本部を立ち上げました。

現場本部は、捕獲支援班、捕獲班、入山者の安全を確保する監視班等と連絡を取り各班の状況を把握しつつ、捕獲支援班の追い込みスタート地点への配置が完了した一一時に捕獲開始を指示し、シカの追い込みと捕獲が始まりました。

捕獲は、捕獲支援班が追い込みの最終ラインに到達した一三時頃まで実施し、シカの目撃頭数は二〇頭以上ありましたが、捕獲成果

は、一一時三〇分までに捕獲した四頭となりました。

これは、安全確保のため追い込み最終ラインは捕獲班から標高一〇〇m程度以上に設定していること、捕獲区域内に捕獲支援班が追い込みできない三つの大きな谷があること等から、捕獲班が発砲できる場所まで下降したシカが少なかったこと等が考えられます。

本作戦は、全員が無事登山口へ下山した一五時三〇分をもって終了し、参加者は、香美市林業婦人部の炊き出し支援でふるまわれたおいしい猪汁を頂いたあと、帰路につきました。

今回の捕獲頭数は四頭に終わりましたが、参加者か

らは、三嶺の森を守るために、多数の民官の機関・団体が一体となつて取り組み、無事作業を終えたことに高い評価を頂いたところであり、引き続き、より安全で成果をあげる取組とするために、今回の事業の検証及び改善策等について、関係機関・団体と協議・検討を進めることにしています。

捕獲支援班等移動中
(三嶺林道終点から入山)





昨年末、高田弘之さん（昭和六三年 安芸営林署長を最後に退職・仰山会会員）から、四国の形状を醸し出している魚梁瀬スギの根盤を寄贈して頂きました。

当時、根株は不整形で辺材部は腐朽が進んでおり、朝に夕に根盤を磨き上げた話も伺いました。

現在、高田さんは、愛媛県宇和島市に住居を構えられています。この度の魚梁瀬スギ根盤の寄贈について、高田さんには局長から感謝状を贈呈させて頂きました。

根盤の前で感謝状を手にされた高田さん



なお、寄贈された魚梁瀬スギ根盤は、皆様にご覧頂けるよう局長室に展示しています。来局された際にはご鑑賞ください。



一二月一二日、四国森林管理局二階会議室にて、今年度第二回目の技術開発委員会を開催しました。

当委員会は、四国森林管



平成二六年度
第二回技術開発委員会

理局技術開発委員会運営要綱に基づき、技術開発の計画・評価・方法等について意見を聴くもので、森林生態学、林木育種、遺伝資源、森林管理経営等の専門家の委員で構成されています。

今回は、平成二六年度中に実施した課題の内、完了報告一課題（囲いわなによる効率的なシカ捕獲試験）、中間報告一課題（下刈省力化によるシカ食害低減効果の検証）、平成二七年度新規課題二課題（①モウソウチク林整備の一考察につい



シカ食害低減効果検証調査区



モウソウチク林整備試験地

て、②竹を利用したシカ食害対策について)の計四課題について審議を願い意見を伺いました。

委員からは、

完了報告課題「囲いわなによる効率的なシカ捕獲試験」では、捕獲率向上に向けた誘引方法の更なる工夫とデータ収集・分析、小型囲いわなの更なる普及に期待している。

中間報告課題「下刈省力化によるシカ食害低減効果の検証」では、下層植生やシカ生息状況の異なる地域毎のデータと調査期間の長期化が必要である。

新規課題「竹を利用したシカ食害対策につい

て」では、竹を単に立て

るだけでなく、どのような状態に立てれば効果的か、多くの方法を考え試す必要がある。

等各課題に対し様々な意見



一二月六日、高知市立神

田小学校において森林・木工教室を行いました。

このイベントは、各学年の保護者が主催し、「一日先生」として、色々な職種の方々に講師として招くもので、去年に引き続き、一年生の保護者から要請を受

森林教室の様子



りましたが、一人で一生懸

命考える子、親子で悩む子、難なくすらすると答える子、と様々で、一門ずつ答え合わせをする度に、「やったー。正解やー。」と歓声が上がり、大変な盛り上がりでした。全問正解者が半数以上となり、補足説明も親子で熱心に聞いてくれました。

木工教室は、糸電話を応用した「ジージーゼミ」作りをしました。今回は大人数であったため、残念ながらほとんど完成したものを配布し、木工用ボンドで貼り付けるだけとなりましたが、子ども達は早くゼミをならしたかったのか、あつという間に完成させて、すぐにホールはゼミの大合唱となりました。

鳴らし終わった子ども達からは、「なんで音が鳴るが？」と不思議そうだったので、このゼミがどうして鳴くのか、少し、音の伝わりについても、学習しました。最後は、OB正岡さんの手作りの木のおもちゃ(パズルやゲーム、けん玉など)